

魅力発信！えひめ農業NOW

令和4年4月

【お知らせ】

魅力発信！えひめ農業NOWは、県ホームページ(※1)で、県下全地区の内容について、閲覧できます。

※1 掲載場所：ホーム＞仕事・産業・観光＞農業＞農業の魅力発信

※2 この動向は、4月中に各普及拠点からの報告をとりまとめたものです。

～愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課～

〒790-8570

愛媛県松山市一番町4丁目4-2

(TEL) 089-912-2558

(FAX) 089-912-2564

<http://www.pref.ehime.jp/noukei/>

目次

目次	1
4月のトピックス5選	3
■ドローンを用いた麦の赤かび病防除を実施	3
■上浦地区早期復興へ関係機関が意識統一	3
■『さくらひめ』きゅん♡きゅんきゅんですキャンペーンを開始	4
■四万十川の濁水軽減に向け高知県と連携	4
■加工用青ねぎ栽培の省力化に向けて	5
魅力発信！えひめ農業NOW	6
東予地方局 地域農業育成室	6
■さといも栽培農家に親芋セル苗増殖方法を指導	6
■土壌肥料勉強会8回講座の最終回は現地研修で技術習得	6
東予地方局 地域農業育成室 四国中央農業指導班	7
■うま茶の振興に関する商談を支援	7
■学校給食米田植え体験を通じた地産地消の推進	7
東予地方局 産地戦略推進室	8
■花木の萌芽前に仕上げせん定を実施	8
■加工用青ねぎ新品種等の有効性を確認	8
東予地方局今治支局 地域農業育成室	9
■さといも栽培未経験者向け「栽培管理作業の紹介映像」の撮影がはじまる	9
■さといものセル苗による種芋生産始まる	9
今治支局 産地戦略推進室	10
■オリーブ栽培の6次産業化について生産者と協議	10
■甘長とうがらしの栽培省力化、高収益化を目指した新たな栽培実証を開始	10
■今治産「さくらひめ」の地元での活用促進と販売PRを実施	11
■地元ワイナリーに向けた醸造用ぶどうの現地実証ほを設置	11
中予地方局 地域農業育成室	12
■なす天敵利用技術の確立に向けて	12
■さといもの優良種苗大量増殖に向けて	12
中予地方局 地域農業育成室 伊予農業指導班	13
■集落営農組織においてスクミリンゴガイ対策実証ほ試験を計画	13
■媛かぐやのセル苗育苗を開始	13
中予地方局 地域農業育成室 久万高原農業指導班	14
■ピーマン収穫作業の労力補完体制推進	14
■クラインガルテン開園式で野菜栽培講習会を開催	14
中予地方局 産地戦略推進室	15
■「さくらひめ」鉢物のさらなる高品質化に向けて	15
南予地方局 地域農業育成室	16
■和菓子原料向けびわの省力袋かけ実証を開始	16
■セル苗を用いた種用さといもの栽培実証を開始	16
南予地方局 地域農業育成室 鬼北農業指導班	17
■田植え講習会と全自動田植え機の実演会を実施	17
■キウイ花粉のかいよう病検定研修を開催	17
■第4回ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会で金賞受賞	18

■ 鬼北町泉小学校で食農教育出前授業を開催	19
南予地方局 地域農業育成室 愛南農業指導班	20
■ 「河内晩柑」の“外科的手法”による園地若返り	20
■ 「河内晩柑」の自根発生の回避を推進	20
■ 野菜の栽培を通じて農業をもっと身近に！ 児童・園児に野菜苗の植え付け実習	21
南予地方局 産地戦略推進室	22
■ うめの春季摘心処理技術のモデル園を設置	22
■ 北海道で「河内晩柑」フェアを開催	22
南予地方局八幡浜支局 地域農業育成室	23
■ 南予用水を利用したマルドリ栽培施設が稼働開始	23
■ かんきつの落葉に対する事後指導を徹底	23
■ 持続可能な農業推進コンクールでミヤモトオレンジガーデンが中国四国農政局長賞を受賞	24
■ 農事組合法人「笑柑園ナカウラ」が将来地域を担う新規就農者を初めて雇用	25
■ 八幡浜市高野地地区で担い手支援チームを設立	25
八幡浜支局 地域農業育成室 大洲農業指導班	26
■ ぶどうの作業負担軽減への可能性を探る	26
■ 竹でキウイフルーツの棚づくりに挑戦	26
八幡浜支局 地域農業育成室 西予農業指導班	27
■ かんきつ地帯で経営補完作物としてえだまめ栽培を推進	27
■ 土地利用型作物の効率的防除を推進	27
八幡浜支局 産地戦略推進室	28
■ フィンガーライムの産地化推進と加工品開発について協議	28
■ 高野地フルーツ倶楽部が3年連続金賞に輝く	28
農産園芸課 高度普及推進グループ	29
■ 「ひめの凜」の高品質栽培に向けた栽培講習会を開催	29
■ 優良種子生産と審査の効率化に向けたはだか麦採種ほの事前審査を実施	30
■ 今年度の作物調査研究会の取組について協議	31
■ かんきつ基盤整備ほ場の土壌流亡、土づくり対策の実証開始	32
■ さといも栽培実証ほの発芽状況を調査	33

4月のトピックス5選

<p>■ドローンを用いた麦の赤かび病防除を実施</p>	<p>東予地方局 地域農業育成室</p>
<p>○地域農業育成室は4月11日、19日、西条市小松のほ場において、生産者、関係機関（JA周桑、全農えひめ、農薬メーカー、県農水研）と連携して、防除時間の短縮を目的に、無人航空機（ドローン）を用いた小麦及びはだか麦の赤かび病防除を実施した。</p> <p>○赤かび病は、開花後の高温多湿条件で発生し、収量や品質の低下等の観点から、防除が欠かせない重要病害となっている。</p> <p>○ドローンを用いたことで、防除時間は従来約4分の1に短縮され、防除効果については5月中旬に検証予定である。</p> <p>○当室は、ドローンの導入により作業時間の短縮等、効率的な防除が期待されるため、今後も各機関と連携し地域への波及を進める。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="308 698 745 999">  </div> <div data-bbox="890 698 1294 999">  </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="405 1001 638 1032"> <p>ドローンによる防除</p> </div> <div data-bbox="1038 1005 1145 1037"> <p>意見交換</p> </div> </div>	
<p>■上浦地区早期復興へ関係機関が意識統一</p>	<p>今治支局地域農業育成室 しまなみ農業指導班</p>
<p>○しまなみ農業指導班は4月27日、平成30年7月豪雨災害からの早期復興に向けて第5回ワーキングチーム会議（23人参加）を開催し、園地整備の進捗状況や整備後の営農計画等に関する情報共有と今後の推進方向に関する意識統一を図った。</p> <p>○会議では、事務局から昨年度の活動状況について報告後、農村整備課から各工区の工事スケジュール等、JAおちいまばりから最新の営農計画等について説明を行うとともに、その後、現地に移動して各工区の現況を確認した。</p> <p>○また、早期成園化に向けて工事段階からの計画的な土づくりが必要との認識で一致したことから、効果的な土づくり手法の検討に資するため、今回は松山地域の取組事例について現地調査を行うこととした。</p> <p>○当班は、今後とも、早期の営農再開と今後の果樹経営モデルとなる未来型樹園地づくりに向けて、関係機関と連携して積極的な支援を行っていく。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="311 1601 732 1915">  </div> <div data-bbox="906 1601 1345 1924">  </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div data-bbox="311 1924 702 1955"> <p>今後の推進方向について意識統一</p> </div> <div data-bbox="997 1935 1235 1966"> <p>各工区の現況を確認</p> </div> </div>	

■『さくらひめ』きゅん♡きゅん♡きゅんです♡キャンペーンを開始

中予地方局
産地戦略推進室

- 産地戦略推進室は、「さくらひめ鉢物産地づくり推進事業」の一環として、SNS等を活用した「さくらひめ」鉢物の情報発信を開始した。
- 4月25日から5月31日にかけて、『さくらひめ』きゅん♡きゅん♡きゅんです♡キャンペーン（第1回）を実施。「さくらひめ」の鉢物（約8,000鉢）にQRコード付きのラベルを添付し、購入者がQRコードから「鉢物『さくらひめ』」HPにアクセスすることで、産地情報を発信するとともに同キャンペーンのInstagram等を紹介する。
- また、同キャンペーンに併せ、管内5ヶ所に「さくらひめ」鉢物のフォトスポットを設置。設置店舗や消費者から、同Instagramに「さくらひめ」の魅力的な写真を投稿してもらい、抽選で6人に、砥部焼の「さくらひめ」オリジナル鉢カバーをプレゼントすることとしている。
- 当室では、これらの取組みにより、「さくらひめ」の更なる認知度向上及び販売促進を図る。



フォトスポットの設置

■四万十川の濁水軽減に向け高知県と連携

南予地方局
地域農業育成室

- 地域農業育成室は4月14日、「令和4年度広見川等農業排水対策協議会総会」で、代かき時期に発生する農業濁水の軽減に向けた石こう資材の施用効果の実証結果を報告した。
- 同協議会では、四万十川の源流の一つである広見川流域の水田からの濁水流出を抑制するため、「浅水代かき」の啓発や「止水板」の活用を推進するとともに、当室が中心となって令和元年度から石こう資材を用いた濁水軽減技術の実証に取り組んでいる。
- 当日は、高知県自然共生課の職員も出席し、協議会の取組みや実証結果等について意見を交換した。同県からは、愛媛県の取組みを参考に、濁水軽減に向けた石こう資材施用実証試験を27日に四万十町で計画している旨の情報提供があった。
- 本技術の普及にあたっては、施用に伴うコストが課題であり、当室では今年度、石こう資材の適正な施用量や施用時期等について調査を行うとともに、環境に配慮して生産した米の販売方法等も検討することにしており、引き続き同協議会や高知県と連携し農業濁水の軽減に取り組む。



両県の活動について意見交換



動力散布機による石膏資材の散布

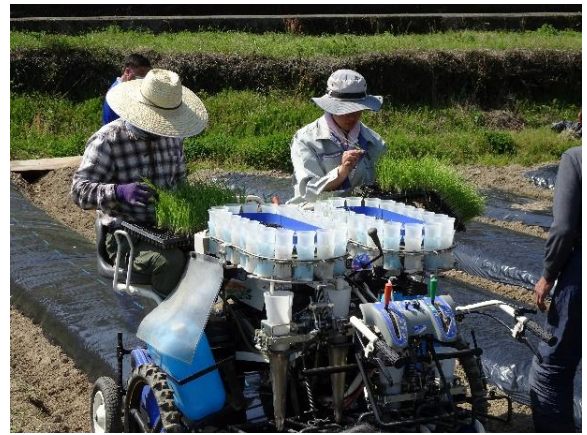


散布量による濁度の違い
(左から無散布, 7.5 kg, 15 kg/10a)

■加工用青ねぎ栽培の省力化に向けて

八幡浜支局地域農業育成室
西予農業指導班

- 西予農業指導班は4月20日、「農事組合法人のべにし」において、新規導入したたまねぎ移植機の加工用青ねぎにおける汎用性とその作業性について検証した。
- 同法人は労働力不足により、農作業が適期に実施できていないことを課題としており、高収益作物（加工用青ねぎ、たまねぎ）の安定生産に向け、労働軽減と適期作業を進めるため、機械を導入。
- 当日は、加工用青ねぎの移植作業を3人1組で実施。従来の手作業による方法と比較すると作業時間が8割削減、移植状況も良好との結果が得られた。
- 当班では、同法人が秋に移植するたまねぎについても栽培面積の拡大を検討していることから、機械化による効率化と労働力に見合った適正規模について検討し、健全な法人経営を指導していく。



導入機械による加工用青ねぎの移植作業

魅力発信！えひめ農業NOW

東予地方局 地域農業育成室

■さといも栽培農家に親芋セル苗増殖方法を指導

- 地域農業育成室は4月25日、さといもの優良種芋の確保を目的とした親芋副芽セル苗増殖法を講習し、JA周桑里芋部会員35人とJA周桑指導員が出席した。
- 講習会では、増殖法の概要と親芋からの芽の切り出し方法、セルトレイへの移植方法について農林水産研究所が作成した動画等で説明し、実演を行った後、同部会員が実際に作業を行い、約70枚のセル苗を作成した。
- 出席者からは「実際に作業してみると思っていたより難しい作業ではなかった」との肯定的な反応が多かった。
- 当室では、生産拡大を図るため、この技術を定着させていくこととしている。



作業工程説明



親芋から副芽を切り出す作業



挿芽したセルトレイ

※親芋副芽セル苗増殖法…親芋をバーミキュライト等に入れ、30℃前後の条件で伏せ込み、副芽を萌芽させる。その副芽をセルトレイに移し、30～40日育苗し、種芋用の優良な種苗を増殖する方法

■土壌肥料勉強会8回講座の最終回は現地研修で技術習得

- 地域農業育成室は4月28日、就農初期の農業者等の早期経営自立に向け、伊予農産株式会社の山内栄代表取締役を講師に、きゅうりほ場で現地研修会を開催。16人が受講した。
- 当研修会は、就農初期の農業者を対象とした土壌肥料勉強会を12月から7回開催しており、その一貫として、現場で即実践できる技術の習得を目指したもの。
- 講師は、きゅうり栽培の線虫対策として、月桃チップの有機質土壌改良資材の活用やマリーゴールド苗の定植など実証結果を説明し、参加者は質問をしながら熱心に受講した。
- 当室は、農家アドバイザー（農業指導士・認定農業者協議会理事）の持つ技術や知識を就農初期農業者へ伝授する取組みとあわせて、引き続き担い手の早期自立に向けた支援を行う。



土壌改良資材等の説明を熱心に聞く参加者



きゅうりほ場で実証結果を確認

東予地方局 地域農業育成室 四国中央農業指導班

■うま茶の振興に関する商談を支援

- 四国中央農業指導班は4月16日、うま茶の振興に向け、フルーツプランナー森平和歌子氏との商談を支援した。
- 商談は、森平氏が「世界マーマレード日本大会」の審査員として来県された機会を捉え、同氏が抹茶（粉茶）の有名ホテル等への展開を模索中であることから、脇製茶園（脇斗志也代表）に園地や製茶場の視察も兼ねて実施したもの。
- 当地域のお茶は、無農薬栽培が大きな強みであり、紅茶や食材としての利用など、様々な活用方策があるとのアドバイスを受け、今後、サンプル提供等を通じたアプローチを進めることとなった。
- 当班は、統一ブランド名で販売開始予定の「うま茶」への波及も期待されるため、今後も関係機関との連携を密に統一ブランド名のPRや販売促進活動を支援する。



商談



園地、製茶場を視察

■学校給食米田植え体験を通じた地産地消の推進

- 四国中央農業指導班は4月23日、学校給食における地産地消の推進等を目的に毎年開催している学校給食米の田植え体験会において、イネの生育過程や収穫後の取組みに関する学習と田植え指導を行った。
- 今回が18回目となる体験会には、市内小学生が約100人参加した。
- 子供たちは、この学習やJAうまによる田植え手順の説明を受けた後、歓声を上げながら丁寧に「コシヒカリ」の苗を手植えしていった。8月下旬には稲刈り体験の収穫祭も予定している。
- 今回の田植えをはじめ、市内農家49戸が生産するエコえひめ認証米は、「うまそだち」の名称で学校給食に提供されるほか、地元産直市などで販売されており、当班は、今後も児童生徒の食育教育や地産地消の取組みを支援する。



お米ができるまでを学ぶ小学生ら



美味しくなれと、苗を手植え

東予地方局 産地戦略推進室

■花木の萌芽前に仕上げせん定を実施

- 産地戦略推進室は、4月1日～12日にかけて管内の花木生産者のほ場10か所でせん定講習を実施した。
- これは、花木（メラレウカ、ピットスポラム）が萌芽する前に、冬季の生育維持のために残しておいた枝等を除去するとともに主幹本数を整理し、強い新芽を出させるために行ったもの。
- また、標高が高い地域にあるメラレウカの寒風害対策として、樹体を不織布で被覆（12月下旬～3月下旬）する実証について、主幹枯れや枯死した株が無かったことを参加者と確認した。
- 今後、当室は、施肥やかん水、病虫害防除指導等を行い、高品質な花木生産を支援する。



生産者に樹形作りを講習

■加工用青ねぎ新品種等の有効性を確認

- 産地戦略推進室は、今般、春先の品質低下につながる抽苔（ねぎ坊主）を抑制する品種や液肥散布の有効性を確認した。
- これは、昨年11月に定植した4品種（新品種1、既存品種3）で、花芽分化期（2月）における液肥散布による抽苔抑制の実証を行ったもの。
- この結果、新品種「春京香」は、液肥無散布でも抽苔の発生はほとんど無く、既存品種では、液肥濃度を高めることで無処理の半分以下に抑制した。
- JAえひめ未来青ねぎ部会長からは、「抽苔がほとんど無いことはメリット」「柔らかく葉先の折れ曲がりが見られたが、栽培方法で改善できるのではないか」と期待を寄せていた。



「春京香」の収穫開始



現行品種「大黒宝」の抽苔発生

東予地方局今治支局 地域農業育成室

■さといも栽培未経験者向け「栽培管理作業の紹介映像」の撮影がはじまる

- 地域農業育成室は、今年度から、さといも栽培に興味を持つ未経験者向けに「栽培管理作業の紹介映像」を制作する。
- 4月10日に1回目として、畝立て・同時マルチと定植作業の撮影を行った。今後、10月までに、土入れや防除、収穫調整等の3回の作業映像の収録を行う。
- 収録する栽培管理作業は、初心者でも取り組み易い10～20a規模を想定し、使用する農業機械も、レンタル可能な小型のものを用了。
- 映像完成後は、新規栽培者の掘起こしや栽培者募集説明会で活用する。



撮影の指示をする普及指導員

■さといものセル苗による種芋生産始まる

- 地域農業育成室は4月21日、JAおちいまばり玉川育苗センターにおいて、種芋生産に興味を持つさといも部会員14人を対象に、セル苗に用いる副芽の切出しや育苗管理方法などセル苗づくりの指導を行った。
- 当室では、さといもの生産拡大の推進と連動し、種芋を安定供給するため、令和5年度から管内生産者が主体となった種芋供給体制の構築を目指しており、今年度はセル苗による増殖技術を学んでもらうのが狙い。
- 来年度から2年かけて増殖した種芋を、令和7年度から栽培農家に供給する計画で、JAえひめ南産の種芋と併せて、5年に1度、全生産者が種芋を更新できる供給量の確保を目指す。
- セル苗育苗は無病で生産性の高い種芋ができることから、農家の期待は大きく、当室では、令和7年度からの種芋供給に向け、きめ細やかな生産技術指導を行っていく。



副芽を切出している生産者

今治支局 産地戦略推進室

■オリーブ栽培の6次産業化について生産者と協議

- 産地戦略推進室は4月21日、オリーブの栽培や加工品開発に取り組んでいる今治市の(株)瀬戸内園芸センターを訪問し、オリーブ茶の商品開発や販売店等の設置に向けた協議を行った。
- 同社は、市内園地にオリーブを新植し栽培面積の拡大に取り組んでおり、今秋にはオリーブ油を搾汁する加工施設に加え、オリーブや地元産品に特化した加工品等を提供する店舗を開設する予定で、現在様々なオリーブ商品の開発に取り組んでいる。
- 当日は、当室が、試作した「オリーブ葉茶」について、茶葉の粉碎法やブレンド法の違いによる風味や味わいを評価するとともに、当室は茶葉の生産に向けた農薬使用の留意点や茶成分の分析方法等についてもアドバイスを行った。
- 当室では、同協議で課題となった原料確保等について、地元で生産に取り組む農業者グループとの連携強化を図りながら商品開発等を引き続き支援するとともに、産地のイメージを高める効果的な広報活動について関係機関等を交えて協議していく。



今後の展開方向に関する提案と協議



オリーブ葉茶の試作品4種

■甘長とうがらしの栽培省力化、高収益化を目指した新たな栽培実証を開始

- 産地戦略推進室は、甘長とうがらし栽培の省力化、収量向上のため、自動かん水装置や高設ベットでの養液栽培実証を開始した。
- 当室では、地方局予算事業「しまなみ地域の魅力ある農業産地化事業」でオリーブやレモン等とともに甘長とうがらしの産地力強化に取り組んでいる。今月からはソーラーパネルで発電した電源をもとに日射量に応じてかん水する拍動型自動かん水装置をハウスと露地の2か所に設置し、必要なかん水量や収量等を調査しながらその効果を検証している。
- また、2月からは農産園芸課と連携し「普及組織先導型革新的技術導入事業」を活用して傾斜地に設置された新型の高機能ハウスにおいて、県内初となる高設ベットでの養液栽培が実証されている。これまでの生育は順調で今月初旬から収穫が始まっており、当室では先進地である京都の養液濃度を基準に指導し、廃液濃度や地上部の生育等を注意深く観察している。
- 当産地では4月29日から関西市場を中心に共販出荷が始まっており、当室では新たな技術の導入等により高収量化や正品率向上を図るとともに、販売支援等にも取り組みながら同品目の知名度向上等に取り組んでいく。



拍動型自動かん水装置の栽培実証



高設ベットでの養液栽培実証

■今治産「さくらひめ」の地元での活用促進と販売PRを実施

- 産地戦略推進室は、今治産「さくらひめ」の消費拡大のため、地元高校入学式での活用促進や観光施設での生産PR等に取り組んでいる。
- 当室では、地元専門校から入学式用「さくらひめ」の提供依頼があったことから、伯方の生産者から提供された花材を式前日の4月11日に同校に届けるとともに、生産者には式場の演台に大束で活けられた花の模様を写真で報告した。生産者からは「豪華に活けてくれてありがとう」「作り甲斐がある」「今後も使ってほしい」との声もあったことから、当室では地元教育機関等へも今回の写真等を紹介するなどしての活用促進を呼びかけている。
- また、当室は年間数十万人を集客している今治市のタオル美術館において、昨年度より農産園芸課と連携し、県オリジナル品種の「さくらひめ」、いちご「紅い雫」の展示栽培を支援しており、「さくらひめ」について、ゴールデンウィークには同館が実施するフェアで母の日のプレゼント商品等として販売される予定。
- 当室では同館と連携し、切り花と鉢物両方の栽培を生かした独自の販売策を展開していくこととしており、同館における展示栽培や販売活動を通して県内外の消費者に県オリジナル品種の知名度向上等を図っていく。



地元専門校へ入学式用「さくらひめ」をお届け



タオル美術館での展示栽培

■地元ワイナリーに向けた醸造用ぶどうの現地実証ほを設置

- 産地戦略推進室は、今治市大三島の地元ワイナリー向けに出荷する醸造用ぶどうの高品質安定生産技術の確立に向け、施肥体系や防除方法等を検討するための実証ほを設置した。
- 当室では、地方局予算事業「しまなみ地域の魅力ある農業産地化事業」でオリーブやレモン等とともにしまなみの立地条件を生かした醸造用ぶどうの産地化に取り組んでいる。
- 今年度は、昨年度の状況を踏まえた新たな防除暦の有効性を検証する実証ほを設置し、4月19日に最初の防除を行った。今後も天候の変化や病害虫の発生状況等を確認しながら現地実証を進めていく。
- さらに、当室はワインの品質を大きく左右する果実の糖度や色づきの向上についても、対策技術を検討することとしており、大三島の気候に適した栽培管理技術を確立し、醸造に適した原料果実の安定供給体制の整備を図る。



実証ほ設置に向けた関係者との協議



醸造用ぶどう実証ほでの防除を実施

中予地方局 地域農業育成室

■なす天敵利用技術の確立に向けて

- 地域農業育成室は4月20日、県・市町・JAの関係者13人出席のもと、「第1回なす天敵利用技術検討会」を開催した。
- 同会では天敵利用実証ほの設置、経営収支モデルの作成等について協議を行い、なすの天敵利用技術の確立に向けて取り組んでいくこととした。
- 天敵の利用は、アザミウマ類、コナジラミ類に加え、今年度は新たにハダニ類の天敵を利用。
- 施設2か所、露地2か所で10月まで調査を行い、天敵の導入効果を検証していく。



天敵資材について説明



土着天敵タバコカスミカメの観察

■さといもの優良種苗大量増殖に向けて

- 地域農業育成室は4月15日、JAえひめ中央及び農林水産研究所と連携し、さといも「愛媛農試V2号」の大量増殖法を実証するため、親芋の伏せ込み作業を行った。
- この大量増殖法は、1つの親芋から約40株の優良苗が増殖でき、種苗用の優良な種芋を確保する技術。
- JAえひめ中央東部営農支援センター管内では、一昨年からはさといも「伊予美人(愛媛農試V2号)」の産地化に取り組んでおり、安定生産技術の普及のため、優良種苗の確保が重要になっている。
- 当室では講習会等で生産者に周知し、同技術を普及していく。



親芋の芽かぎ作業



萌芽状況

中予地方局 地域農業育成室 伊予農業指導班

■集落営農組織においてスクミリングガイ対策実証試験を計画

- 伊予農業指導班では、管内集落営農組織において、昨年度からスクミリングガイ対策実証試験について検討を重ねている。
- 昨年度の防除手法に係る実証試験結果を踏まえ、今年度は高い防除効果を示した手法を中心に、効果の安定化を図ることとした。
- 今回、管内3市町で7組織の計16か所を試験区とし、基本手法は、浅水管理と田植え直後の殺菌剤散布とし、食害が多発している水田では、周辺作物や水管理を考慮したうえでの石灰窒素施用も検討しつつ、防除を1回に収めることを目標としている。
- 田植え後、約2週間が防除のポイントとなるため、当班では関係機関とも連携し、定期的な巡回調査や指導をしていく予定。



伊予地区集落営農組織等連絡協議会役員会 (3/25)

■媛かぐやのセル苗育苗を開始

- 伊予農業指導班は4月28日、昨年から栽培を開始しているファーマーズマーケットいよっこの出荷者4人に、「媛かぐや」の育苗を指導した。
- 「媛かぐや」は県が育成した特徴あるさといも品種であるが、種芋を直接定植すると、萌芽、生育が不均一になるため、セル苗による栽培が必要である。
- そこで、県農林水産研究所が確立した「媛かぐや」のセルトレイに移植する方法について実演を交えながらポイントを説明した。
- 今後、直売所向けに家庭消費できる600～800gの大きさの「媛かぐや」になるよう指導し、特産品化を進めていく。



動画による作業手順の説明



セルトレイ移植の実演

中予地方局 地域農業育成室 久万高原農業指導班

■ピーマン収穫作業の労力補完体制推進

- 久万高原農業指導班は3月30日～4月1日、久万高原ピーマン部会支部栽培講習会で、ピーマン収穫作業の労力補完体制について説明した。
- 労力補完体制は、ピーマン農家の高齢化が進む中、規模拡大や体調不良等による栽培中断を防ぐため、部会組織活動に位置付けられたもの。
- 出席者は、労力補完の必要性を理解するとともに、必要に応じて活用することとした。
- 当班は、産地全体の生産量向上に向け、今後も引き続き関係機関と連携し、労力補完体制を推進していく。



労力補完体制の説明

■クラインガルテン開園式で野菜栽培講習会を開催

- 久万高原農業指導班は4月10日、久万農業公園で行われたクラインガルテン開園式において、クラインガルテン契約者20人を対象に野菜栽培講習会を開催した。
- この講習会では、契約者の栽培技術の習得を目的に、野菜栽培の基礎知識、土づくり、久万高原町で見られる病害虫、農薬の適正使用について初心者にもわかりやすく解説した。
- 久万高原農業指導班では今後も農村と都市の交流推進に向け、支援を続けていく。



野菜栽培講習会

※クラインガルテンとは、久万農業公園アグリピアが運営する都市農村交流推進のための市民農園で、松山市を中心とした中予地域から利用があり、コロナ禍の影響で需要が増え、現在の利用率は91%となっている。

中予地方局 産地戦略推進室

■「さくらひめ」鉢物のさらなる高品質化に向けて

- 産地戦略推進室は4月28日、「さくらひめ」鉢物の生産技術向上を図るため、連絡会議及び現地検討会を開催し、生産者等17人が参加した。
- 連絡会議では、当室から令和4年度の栽培技術実証計画やInstagramによる情報発信について報告し、花き研究指導室からは、次作に向けた鉢物の年内出荷技術について説明した。
- 現地検討会では、母の日を中心に出荷する「春出し加温栽培」を実施している東温市の生産者のハウスを訪れ、さらなる高品質・安定出荷に向けて情報交換を行った。
- 参加者からは、「どうすれば、草姿を揃えて栽培できるのか」「摘心はどのようにしているのか」など活発な意見交換が行われた。
- 当室では引き続き、花き研究指導室等と連携しながら、研修会や個別指導等により、鉢物の高品質化を図る。



ハウスでの情報交換

南予地方局 地域農業育成室

■和菓子原料向けびわの省力袋かけ実証を開始

- 地域農業育成室は4月8日、宇和島市西三浦で加工用びわの省力的な袋かけ実証試験を開始した。
- これは、地方局予算事業「高級菓子用くだもの産地確立事業（令和4～6年）」を活用し、加工用びわに特化した省力技術の確立を目指すもので、全労働時間の約3割を占める袋かけ作業の更なる省力化・低コスト化を図るのが狙い。
- 当日は、JAえひめ南と連携して、大型の不織布や収縮性ネットなど5種類の被覆資材を用いて作業を行った。
- 当室では、今後、栽培講習会の開催に合わせ本技術を紹介するとともに、収穫時の果実品質や作業性などを調査し、省力技術の確立を目指す。



大型不織布の被覆

■セル苗を用いた種用さといもの栽培実証を開始

- 地域農業育成室は4月18日、JAえひめ南三間育苗センターで農林水産研究所、JAえひめ南と連携し、セル苗を用いた種用さといも栽培における親芋の伏せ込みを開始。関係者11人が親芋約120個の頂芽と腋芽をかぎ取り、育苗センターの出芽室に搬入した。
- この取組みは、地方局予算事業「種用さといも生産体制確立事業」の一環で、南予管内におけるさといもの生産拡大と優良種芋の産地化に向けた技術の普及・定着を図るもので、今年度は6人の農家が、セル苗による種芋の生産実証に取り組む予定である。
- 当室では、今後、親芋から発生する副芽の伸長に合わせ、5月中～下旬は芽の切り出しとセルトレイへの移植を関係機関と行い、6月中旬～下旬には実証農家への定植講習会を予定しており、引き続き関係機関と連携し、優良種芋の生産体制の確立に向けた取組みを進める。



セル苗の作成に向けた作業



親芋の頂芽と腋芽をかぎ取り

■田植え講習会と全自動田植え機の実演会を実施

- 鬼北農業指導班は4月9日、松野町農作業受託協議会と連携し、田植え作業の講習と全自動田植え機の実演会を開催した。
- 田植え作業の講習では、「代かきは2回実施し、田面を均平にすること」「苗は苗丈12～15cm程度で2～2.5葉を目安に植え付けること」「田植え機の重心は機体の後方にあるため、操縦に注意し転倒を防ぐこと」等のポイントを説明した。
- 全自動田植え機は、GPSによる位置情報をもとにほ場の形や距離を読み込み、自動走行による植え付けが可能であることに農家は興味を示していた。
- 当班では、引き続き生産者に安全で正しい農業機械の利用方法と経営規模やほ場条件に応じた省力機械の導入推進を図る。



全自動田植え機



無人で走行および植え付けが可能

■キウイ花粉のかいよう病検定研修を開催

- 鬼北農業指導班は4月26日、果樹研究センターと連携し、松野町農林公社でLAMP法によるキウイフルーツ花粉のかいよう病検定について研修会を開催した。
- キウイフルーツ花粉は、生産者が早朝に収穫した花蕾を10時までに同公社に搬入し、採薬後、乾燥機で18時間乾燥し、精製機で取り出されて完成品となる。
- また、出荷前のキウイフルーツかいよう病検定は公社が独自で行うもので、2人の職員が生産者とハウス単位で検定を行う計画になっている。
- 当班では、5月からの花粉初収穫に向け、関係機関と連携し、一連の作業にかかる指導・支援を行う。



LAMP法についての関係者への説明

※LAMP法…PCRと比較し、迅速、簡易、正確な遺伝子増幅法

■第4回ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会で金賞受賞

○鬼北農業指導班では、鬼北地区生活研究協議会を対象に、特産ゆずを使った特産品開発研究に長取り組んでいる。同大会へは当初より入賞を目指して特産品加工研究会や講座を開催し、3年前から出品し、銅賞、銀賞を受賞しており、今回初めて「アマチュアの部自家製」において当協議会が金賞に輝いた。

○4月15日、地区生活研究協議会研修会で受賞した鬼北町日吉夢工房の岩本恵子氏から「金賞を目指して研究に取り組み、初めて夢が叶い大変嬉しい。今年は、マーマレードの商品化を目指したい」との報告があった。

○当班では、3年連続の受賞を受け技術力もアップしたことから、同町や道の駅とも連携し、商品化に向けて活動支援に取り組む。



受賞を報告する岩本氏

■鬼北町泉小学校で食農教育出前授業を開催

- 鬼北農業指導班は4月28日、食農教育の一環として鬼北町立泉小学校5、6年生の児童12人を対象に、ぶどう「マスカット・ベリー・A」の栽培方法について授業を行った。
- 同小学校のぶどうは、8年前に当班の指導のもと植え付けられ、「子供の頃から農を身近に考える生きた教材」として、同小学校が中心となり管理、栽培されている。
- 授業では、クイズ方式で意見交換の場を設けながら、一年を通じたぶどうの栽培管理をパワーポイントで分かりやすく説明した。
- 児童からは、「この品種が育成されるまで何年かかったのか」など、活発な質問が多く出され、有意義な授業となった。
- 当班では、今後ブドウの生育に合わせ、花穂整形、ジベレリン処理、摘粒、収穫までの一連の作業を子供達と一緒にいき、農業の魅力を伝えることとしている。



ぶどうの栽培方法についての授業



クイズを交えた授業

■「河内晩柑」の“外科的手法”による園地若返り

- 愛南農業指導班は4月13日、南宇和地区営農指導連絡推進会議果樹部会と連携し、「河内晩柑」の省力化対策等に関する実証ほを設置した。
- 実証の一つは、老木園の「河内晩柑」が自らの根（自根）を台木のカラタチを迂回して直接地面に下ろすこと^{※1}で樹勢が強くなり、高樹高に繋がっていることが昨年度明らかになったことから、この自根にチェーンソーで傷を入れることで、適度な樹勢に落ち着かせることを狙うものである。
- 二つ目は、高くなった樹を人の目線以下にまで一気に切り下げ（カットバック^{※2}）、低い位置に成り枝を再生するものであり、当班では今後、これらの実証について、新梢長や収穫調査を行い、効果を測定することとしている。



自根発生樹へのチェーンソー傷入れ



カットバックにより低い位置でのなり枝再生を狙う



※1 カラタチ台木に河内晩柑を接ぎ木しているのので、通常は河内晩柑に根は発生しない。

※2 カットバックとは通常のせん定よりも大きく切り戻して新梢の発生を促し低樹高化を図るもの。

■「河内晩柑」の自根発生の回避を推進

- 愛南農業指導班は4月22日、南予地域果樹産地協議会南宇和支部と連携し、補助事業で苗木を導入した「河内晩柑」の新植園において植付け状況を巡回確認した。
- 苗木を深植えた場合、植え付け後1～2年以内に自根が発生し、高樹高化による作業性の低下や強樹勢化による着果量減少につながりやすいため、当班では植付け方法のパンフレットを作成し、植付け前に事業対象者に配布している。
- 昨年度の調査では、4園地120本で15%の深植え率であったが、今回は8園地456本0.4%で、パンフレット配布の効果がうかがえた。
- 苗木を導入する生産者は毎年変わることから、今後も当班では、正しい植付け方法を啓発していく。



深植え状態を確認



接ぎ木部が出ており浅植となっている

■野菜の栽培を通じて農業をもっと身近に！ 児童・園児に野菜苗の植え付け実習

- 愛南農業指導班は4月19日～22日、愛南町農業支援センターと連携し、町内の小中学校4校と保育所3か所の生徒等を対象に野菜苗の植え付け実習を行い、ミニトマトなどの果菜類、しょうが、さといもを植え付け指導した。
- これは食農教育の一環として、栽培を通じて、野菜をはじめとする農作物への興味を喚起し、生産から食卓に届くまでに関わる人たちへの感謝を育むために実施しているもので、実習では、野菜の名称や苗の取り扱い方、植え付け方法などを指導し、一緒に作業を進めた。
- 実習後、児童からは「家でも植えてみたい」などの声があったほか、感想を報告書として取りまとめることとなっており、当班では、学校や保育所からの栽培相談にも対応しながら、実習支援を通じ地域農業への関心を高めていく。



小学校にて当班3人で実習指導



保育所園児が野菜苗定植

■うめの春季摘心処理技術のモデル園を設置

- 産地戦略推進室は4月28日、松野町農林公社と連携し、うめ栽培で省力化につながる「春季摘心処理」実証モデル園を設置した。
- 昨年度までの調査の結果、同処理により徒長枝の発生が抑制され、冬季せん定の負担軽減につながることや、樹冠内部への採光改善による花芽着生の向上などが確認されている。
- また、樹勢が強いほど処理効果が高いことから、生育が旺盛となる植え付け後10年以内の園地をモデル園として選定している。
- 当室では、栽培講習会等を通じてモデル園での生育状況や省力化への効果を生産者へ示すとともに、個別巡回指導を強化して技術の普及を図っていく。



主枝から伸びた上向きの新梢を摘心



摘心処理後（点線部を切除）

■北海道で「河内晩柑」フェアを開催

- 産地戦略推進室は、管内の特産品である「河内晩柑」の新たな販路開拓を目指しており、北海道の量販店での「河内晩柑」フェア開催が決まったことを受け、4月11日、愛南町農業支援センター、JAえひめ南、愛南農業指導班と共に出荷規格の確認やPR手法の協議を行った。
- 同フェアは、ブランド戦略課との連携により実現したもので、「河内晩柑」に焦点を当てたフェアは北海道で初の試み。愛南町からはL規格を中心に計4tを出荷、4月22、23日の2日間、イオン系3店舗で専用売り場を設置した。
- 同JAによると「北海道でのかんきつのニーズは大きく、今回のフェアをきっかけに今後の取引につながれば」と期待を寄せている。
- 当室では、他のかんきつが少ない時期に出荷可能な「河内晩柑」の特長を生かし、ニーズの高まる東北や北海道など、新たな地域への販路開拓に向け、引き続き関係機関と連携して取り組むこととしている。



河内晩柑フェアの準備



北海道での販売コーナー

南予地方局八幡浜支局 地域農業育成室

■南予用水を利用したマルドリ栽培施設が稼働開始

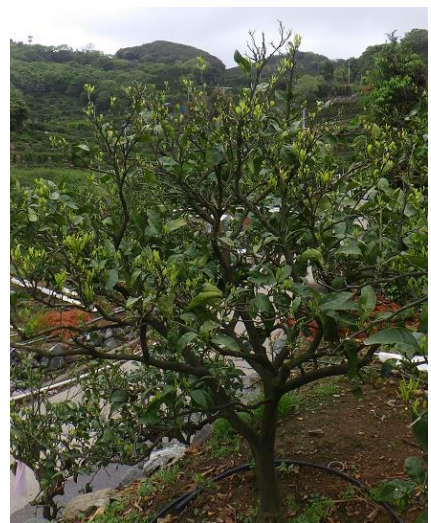
- 地域農業育成室は、かんきつの高品質・安定生産技術としてマルドリ栽培を推進しており、今般、八幡浜市真穴地区で「農地耕作条件改善事業」を利用し、南予用水を活用したマルドリ施設が9.6haで導入され、4月から稼働した。
- 当室では、これまでの調査データを利用したマルドリ栽培マニュアルを取りまとめており、初めて取り組む農家に対して、本マニュアルを参考に施設を活用したかん水及び施肥方法等を指導している。
- なお、南予用水では用水量や時期に制限はあるため、調査・研究を進め、改善点をマニュアルに反映することとしている。
- 管内では、本年度以降も上記事業を活用して施設の導入を予定しており、当室では今年度から実施する地方局予算事業「南予儲かる農業人材育成事業」を活用し、南予用水におけるマルドリ栽培技術について検証し、儲かる農業の実現を目指す。



南予用水を利用したマルドリ施設

■かんきつの落葉に対する事後指導を徹底

- 地域農業育成室は、かんきつ全般において3月中旬頃から急激に多くなった落葉について、J Aと連携して現地調査を行い、「冬季～春先の落葉の原因と今後の対応」として資料に取りまとめ、事後指導の徹底に努めている。
- 今年の落葉は、昨年の秋季から降水量の少ない状態が続いたこと、果実品質を向上させるためにマルチなどで樹体ストレスをかけたこと、さらに、1～3月にかけて気温の低い状態が続いていたことなどの複合要因が考えられる。
- 激しく落葉した場合は、着花数の減少や果実品質の低下が予想されることから、4月に実施した花芽管理講習会等で、落葉後の対策として、液肥の散布やせん定時期を遅らせることなどを指導した。
- 今年は、全体的に着花量が少ない傾向にあることから、当室では、引き続き花芽管理やかぶさり枝の除去等を徹底し、着果確保による安定生産を目指す。



落葉が発生している樹

■持続可能な農業推進コンクールでミヤモトオレンジガーデンが中国四国農政局長賞を受賞

- 地域農業育成室が活動を支援し、意欲的な取組を行う八幡浜市の(株)ミヤモトオレンジガーデンは4月、令和3年度未来につながる持続可能な農業推進コンクールのGAP部門で、中国四国農政局長賞を受賞した。
- 同法人は、かんきつ類では国内初となるグローバルGAP認証を平成27年年に取得。自社で開発したGAP認証システム*の提供や、本システムと連動した新選果機の導入によるトレーサビリティの確立、さらには、農業高校生や農業者に対するGAPの普及・啓発活動が、持続可能な農業推進に大きく貢献したことが高く評価された。
- 当室では、引き続き適正な管理指導を行うとともに、本取組事例を参考に、さらなるGAPの理解促進と普及に努める。



各種研修会でGAPの重要性について講演

※GAP認証システム：GAP認証に必要な栽培記録、トレーサビリティを
パソコン・スマートフォン上で簡単に管理できるシステム

■農事組合法人「笑柑園ナカウラ」が将来地域を担う新規就農者を初めて雇用

- 地域農業育成室が地方局予算事業「西宇和地域柑橘集落営農支援事業」で経営力強化等をサポートする農事組合法人「笑柑園ナカウラ」（伊方町）が、4月から地元でUターンした新規就農者1人の雇用を始めた。
- 当面は、同法人が管理するかんきつ園（35a）の作業の他、摘果、収穫、せん定、防風林管理等の農作業受託を行い、就農後、かんきつ栽培に必要な技術の習得と向上を図ることとしている。
- 同法人では、将来、本人が独立就農した時に安心して経営開始できるよう、管理する園地を数年後には引き渡す考えで、次代の担い手の確保と集落の園地維持に期待が膨らんでいる。
- 当室では、同新規就農者に対する収益性の高い栽培体系の提示や技術指導はもとより、組織リーダーの育成等を通して同法人の経営力や技術力の向上を引き続き支援するとともに、こうした取組の成果を地域内で共有し、他集落への波及に努める。



芽かき作業を行う新規雇用就農者

■八幡浜市高野地地区で担い手支援チームを設立

- 地域農業育成室は4月1日、管内で12地区目となる八幡浜市高野地地区で、農業者ら29人で構成する「高野地担い手支援チーム」の設立を支援した。
- 同様のチームは、担い手の確保対策として、移住就農希望者に対して農業体験から就農・定着までのサポートを行うことを目的に、管内13地区で設立を目指している。
- 現在、当地区への就農希望者が2人おり、当室では、就農支援チームと連携しながら就農に向けて栽培技術や経営のサポートを行うとともに、新たな移住就農相談者とのマッチングも進め、地域の担い手確保に努める。



高野地担い手支援チームの設立総会

■ぶどうの作業負担軽減への可能性を探る

○大洲農業指導班は4月18日、果樹研究センターで開催されたぶどう用アシストスーツの実演および説明会に参加し、その効果を検討した。

○大阪府の太陽パーツ(株)が開発した“ワークアシストTAFWAN”は、一定の角度でのみアシスト機能が働く設計で、自由に腕を動かせるため安全性が高い上に、使用者の体格に合わせて調整可能、装着も容易である。

○実際に着用したところ、腕を作業の位置まで上げるとアシスト機能が働き、楽にその体勢を維持することが可能。体が固定されるような感覚もなく、本体の重みもあまり感じないため、作業負担の軽減が期待される。

○当班では、県下一のぶどう産地の維持発展を目指し、作業負担の大きい摘粒作業を中心として、管内生産者を対象に実証を行い、その実用性を検証する。



腕上げ体勢をアシスト

■竹でキウイフルーツの棚づくりに挑戦

○大洲農業指導班は4月20日、大洲市青年農業者協議会と連携して、キウイフルーツの栽培棚を竹で試験的に製作した。

○これは、鉄などの資材費が高騰する中、県内で放置竹林の面積が最大である大洲市において、地域資源を有効に活用し、環境に配慮した持続可能な農業の実践を模索して実施したもの。

○竹は協議会員の園地周辺にあるモウソウチクを利用。親柱と棚の棧(さん)、間柱に竹を用い、親柱の基礎には鋼管を埋めて添え、棚の上部には不要になったワイヤーメッシュを張った。青年農業者と関係機関職員8人が4.5m四方の棚を約4時間で完成させ、キウイフルーツ雄木1本を植え付けた。

○当班では、通常施工の場合とのコスト比較をするとともに、製作した棚の耐久性や作業性を継続的に確認し、実用性を検証する。



竹を適度な長さにカット



完成した竹棚

八幡浜支局 地域農業育成室 西予農業指導班

■かんきつ地帯で経営補完作物としてえだまめ栽培を推進

- 西予農業指導班は4月4日、明浜町俵津地区でえだまめ栽培講習会を開催し、栽培予定者など25人が参加した。
- 俵津地区は、かんきつ栽培とあわせ、極早生たまねぎを栽培する農業者が多く、その後作として栽培できる品目について生産農家から相談を受けており、4月播種、7月収穫の早生のえだまめの栽培を提案。
- 参加した農業者からは、初めて栽培に取り組む品目であることから「播種の適期」「播種後の管理作業（防除等）」「収穫時期」などについて活発な質疑が交わされた。また、ほ場で播種を実演し、えだまめ栽培への理解を深めた。
- 当班では今後、現地巡回や栽培講習会を継続的に行い、経営補完作物としての野菜栽培による農家所得の確保を支援していく。



えだまめの品種特性を説明



えだまめの播種作業実践

■土地利用型作物の効率的防除を推進

- 西予農業指導班は4月14日、西予無人ヘリ防除組合連絡協議会*のオペレーター20人を対象に、麦の生育状況に応じた赤かび病防除講習会と無人ヘリコプター安全操作研修を実施。
- 管内の令和4年産麦の生育は、平年よりやや遅く推移しており、出荷に影響を与える麦赤かび病に最も感染しやすい開花期以降の適期防除に努めるよう指導した。
- また、各組織が所有する無人ヘリコプターのメーカーとともに、使用上の留意点の確認やシミュレーター機を用いた操作確認を行った。
- 当班では、作物の生育や病害虫の発生状況に応じた適期防除の実施及び担い手への負担軽減のため、無人ヘリと合わせて、ドローンによる防除などスマート農業を推進していく。



令和4年産麦の生育状況に応じた防除を指導



無人ヘリのシミュレーター操作

*西予無人ヘリ防除組合協議会：宇和町内の水田農業を営む担い手で構成され、水稻・麦・大豆の防除を担っている4組織で構成、年間約1,600haの防除を実施している。

八幡浜支局 産地戦略推進室

■フィンガーライムの産地化推進と加工品開発について協議

- 産地戦略推進室は4月7日、フィンガーライム産地化推進協議会総会において、会員9人と産地化の方向性について協議した。
- 平成29年に2aであった栽培面積は、令和2年度に県単事業を用いて施設整備を行ったことから、令和3年には30aまで拡大。今年度から収穫が開始され、今後、生産量の大幅な増加が見込まれる。
- 現状では、生産量が需要に追い付いておらず、中果の販売のみであることから、当室では今後の販売方法の多角化を見据え、県産業技術研究所と連携し、加工品の開発を行うこととなった。



産地化の方向性について生産者と協議

■高野地フルーツ倶楽部が3年連続金賞に輝く

- 産地戦略推進室は4月16日、17日、第4回タルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会の開催を支援した。
- 同大会では、これまでに管内の生産者が多数出品・入賞しており、本年も6次産業化に取り組む高野地フルーツ倶楽部が、プロの部で3年連続金賞を受賞。また、県内関係者で金賞を受賞したのは、プロの部で8作品、アマチュアの部で30作品の計38作品(受賞作品の3.3%)であった。
- 当室では、管内生産者の本大会への出品が多いことから、6次産業化の支援を継続して行う。



金賞受賞作品



金賞を受賞した高野地フルーツ倶楽部

■優良種子生産と審査の効率化に向けたはだか麦採種ほの事前審査を実施

- 高度普及推進グループは4月27日、伊予市、松前町のはだか麦採種ほ場において第2期（糊熟期）のほ場審査にかかる事前審査を行った。
- これは、栽培状況等をあらかじめ確認しランク分けするとともに、管理が不十分な栽培者に対して改善事項を指導し、本審査業務の効率化と精度向上を目指すために行ったもので、生産者の立会を求めず最少人数で効率的な審査が行えるよう、採種ほ場をマッピングした地図を事前に作成して実施した。
- 本審査は5月9日、10日に実施予定で、審査終了後は、高品質生産に向けた適期刈取指導を行うこととしている。



事前審査で管理や倒伏状況を確認



マッピングした採種ほ場の一部
(ベースマップ：ESRI)

■今年度の作物調査研究会の取組について協議

- 高度普及推進グループは4月13日、県下の作物担当普及指導員等（20人）を対象に今年度の作物調査研究会の取組について協議した。
- 同研究会は、普及指導員の技術力・指導力の向上や活動の高度化を図っており、各普及拠点が共通テーマに基づいた実証や調査に取り組み成果を共有することで、より実践的な技術と知識の習得を目指している。
- 当日は、県育成品種「ひめの凜」のポテンシャルを発揮する栽培技術の確立及び全国規模の食味コンクールでの入賞を目指す「ひめの凜金賞プロジェクト」を昨年度に継続して実施することを確認するとともに、各拠点での取組数を増やすこととなった。
- また当グループは、プロジェクト実施にあたり、昨年度の栽培ほ場と今年度の栽培予定ほ場の土壌の可給態窒素を簡易測定して地力を把握するとともに、土づくりや施肥設計等の試験内容に反映させた。一部ほ場では4月下旬に鶏ふんや土壌改良材を施用した土づくりを開始した。
- 今後、当グループは各拠点の取組を支援するとともに、同研究会にて計画と実施状況を共有し、「ひめの凜」の良食味栽培を推進していく。



Web 会議による協議



土づくりを開始したほ場

■かんきつ基盤整備ほ場の土壌流亡、土づくり対策の実証開始

- 高度普及推進グループは、農業法人と連携して、松山市下難波地区の基盤整備後のかんきつほ場（60 a）で、土壌流亡、土づくり対策に向けた実証を開始した。
- 本実証は、今年3月に植付けた2年生苗木の間に、等高線状にソルゴーを栽培することで、地表面流去水の緩衝帯として土壌流亡を防止するとともに、刈り取った地上部を苗木周辺へ敷き詰めて土壌の過乾燥防止と有機物の供給による土づくりを効果的、効率的に実施するもの。ソルゴーは生育旺盛で草丈も高いことから防風対策にも有効で、苗木の生育促進効果も期待できる。
- また当グループは、同法人が新たに営農を開始した工区（50a）においてもほ場全面にソルゴーを播種。昨冬から栽培した緑肥用ムギのすき込みを4月上旬に行うとともに、痩せ土で保肥力や保水力が低くムギの生育が悪かった部分には堆肥を集中投入した結果、4月下旬には発芽後の良好な生育を確認した。
- 当グループは今後、ソルゴーの生育状況に応じた刈り取り適期を検討し、苗木の夏季の高温乾燥対策に役立てる。



等高線状に播種したソルゴーと芽かぎ指導



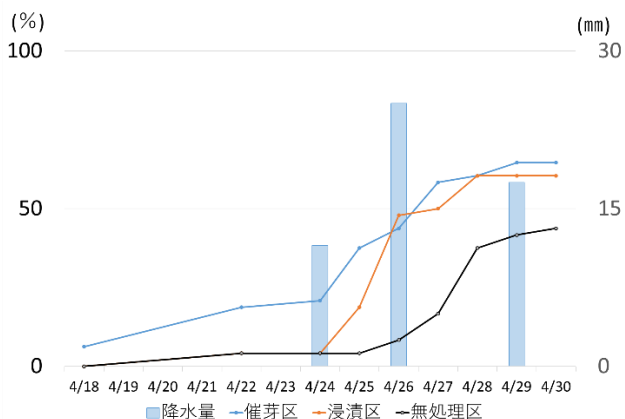
生育良好なソルゴー（全面播き）

■さといも栽培実証ほの発芽状況を調査

- 高度普及推進グループは、種芋の定植前の催芽処理が生育、収量及び品質に及ぼす影響を調査するため、今治市のさといも実証ほで3月17日の定植以降、発芽状況等を調査している。
- 種芋は、11月に掘り取り風乾後、常温の倉庫で貯蔵し、やや乾燥しているものを使用。調査は、定植前に種芋を28℃で10日間の催芽処理した区(催芽区)、1日常温の水に浸漬処理した区(浸漬区)及び無処理区の3区制で実施している。
- 調査の結果、催芽区の発芽は約5日早まったが、4月下旬の降雨により各区とも発芽が一気に進み、催芽区及び浸漬区の発芽率は同等となるとともに、無処理区と比較して高く推移しており、処理の有効性が確認された。
- 当グループは今後、各調査区の生育、収量及び品質等の調査を実施し、安定生産に向けた現場指導に取り組む。



各区の発芽状況
(左：無処理区 右：催芽区)



各調査区の発芽率と降水量の推移

■■■ 情報の問合せ先一覧表 ■■■

文中略称	正式機関名	所在地および連絡先
東予	東予地方局農林水産振興部 農業振興課	西条市丹原町池田 1611 TEL:0898-68-7322 FAX:0898-68-3056
四国中央	東予地方局農林水産振興部 農業振興課地域農業育成室 四国中央農業指導班	四国中央市中之庄町 1684-4 TEL:0896-23-2394 FAX:0896-24-3697
今治	東予地方局農林水産振興部 今治支局 地域農業育成室・産地戦略推進室	今治市旭町 1-4-9 TEL:0898-23-2570 FAX:0898-22-9724
しまなみ	東予地方局農林水産振興部 今治支局地域農業育成室 しまなみ農業指導班	今治市伯方町木浦甲 4637-3 TEL:0897-72-2325 FAX:0897-72-1912
中予	中予地方局農林水産振興部 農業振興課	松山市北持田町 132 TEL:089-909-8762 FAX:089-909-8395
久万高原	中予地方局農林水産振興部 農業振興課地域農業育成室 久万高原農業指導班	上浮穴郡久万高原町入野 263 TEL:0892-21-0314 FAX:0892-21-2592
伊予	中予地方局農林水産振興部 農業振興課地域農業育成室 伊予農業指導班	伊予市市場 127-1 TEL:089-982-0477 FAX:089-983-2313
南予	南予地方局農林水産振興部 農業振興課	宇和島市天神町 7-1 TEL:0895-22-5211 FAX:0895-22-1881
鬼北	南予地方局農林水産振興部 農業振興課地域農業育成室 鬼北農業指導班	北宇和郡鬼北町興野々1880 TEL:0895-45-0037 FAX:0895-45-3152
愛南	南予地方局農林水産振興部 農業振興課地域農業育成室 愛南農業指導班	南宇和郡愛南町城辺甲 2420 TEL:0895-72-0149 FAX:0895-73-0319
八幡浜	南予地方局農林水産振興部 八幡浜支局 地域農業育成室・産地戦略推進室	八幡浜市北浜 1-3-37 TEL:0894-23-0163 FAX:0894-23-1853
大洲	南予地方局農林水産振興部 八幡浜支局地域農業育成室 大洲農業指導班	大洲市田口甲 425-1 TEL:0893-24-4125 FAX:0893-24-5284
西予	南予地方局農林水産振興部 八幡浜支局地域農業育成室 西予農業指導班	西予市宇和町卯之町 3-434 TEL:0894-62-0407 FAX:0894-62-5543